

通訳教育における否定表現への対応と指導法

吉村 理一^AA Method of Handling and Coaching Negative Expressions
in Interpreter EducationRiichi YOSHIMURA^A

Abstract: Based on improper interpretations (or translations) made by students who major in English, this paper investigates the cause of the interpretive errors and offers a solution for it from the perspective of (English) Linguistics. We will deal with various kinds of negative expressions in English below. This article points out that the students often oversimplify their meanings and tend to unify those phrases into one simple form. More specifically, they only produce *-nai*, which is a typical negative morpheme in Japanese. The author makes note about this situation, stating that even English major students are not familiar with the gradation of negative words, the meanings, intentions of the word and construction choices. This report insists that it is necessary to incorporate the knowledge on the lexicon and constructions from (English) Linguistics into Interpreter Education for the students to make accurate interpretations.

Keywords: Interpreter Education, Global Human Resources, Negative Expressions, Error Analysis, English Linguistics, Syntax and Pragmatics

1 導入

1.1 本論文の目的

本論文では、大学における通訳教育の実践の中で見受けられる学生が示す不適切な訳出に焦点を当て、①なぜそのような不適切な訳出を行うように至ったのかというエラー分析 (Error Analysis) ¹⁾ を行い、②不適切な訳出を防ぐための方策を言語学 (特に英語学) によってもたらされる知見を活かした上で提案することを目指す。本稿の考察対象は否定表現であり、具体例は以下の 1.3 節で提示する。

1.2 通訳教育の役割

経済産業省の「産業人材パートナーシップ グローバル人材育成委員会」により 2010 年 4 月に公表された報告書から見て分かるように、日本企業が今後の生き残りをかけて成長を続けていくには、世界市場を相

手に戦略を立てなければならないのは明白な事実である。このため、世界規模で活躍できる人材の育成が急務とされており、いわば人材の醸造所である大学に寄せられる産業界からの要望と期待は益々膨らむことが予想される。また、福岡大学で開催された第 1 回グローバル人材育成教育学会全国大会のシンポジウムで報告されていたように、大学側も入学志願者の確保、学生の就職先の開拓、そして就職率アップを念頭に、語学教育や異文化理解、国際ビジネス等の国際化教育の拡充が全国規模で進む傾向にある。重要なことに、これらの国際化教育は今や学部や学科の垣根を越えて、専門分野を問わず幅広い学生に提供されていることである。このことは、英語を (で) 専門的に学ぶ (例えば、文学部や外国語学部等で英語を専攻している) 学生達に大きな影響を与えている。これまでのグローバル人材育成教育の主なターゲットであったこれらの学生達は、英語を専門としない学生達が国際化に関しての科目を履修しない分、それらの科目を履修して「あ

A: 九州大学大学院人文科学府

る程度の知識と技術」を身につけるだけでも付加価値が生まれ、就職活動の際も英語を専門的に学ぶ彼らの存在意義が認められていたように思われる。しかしながら、皮肉なことに、専門性の垣根を越えた国際化教育が加速するにつれ、自らの専門分野とは別に英語等の語学と異文化理解を身に修めた学生が増えるため、英語を専門とする学生達はこれまでのように「ある程度の知識と技術」を身につけただけでは埋没してしまうのである。このような文脈で、彼らには、英語を(で)専門的に学ぶ意義が問われていると言っても良い。これから更にグローバル人材育成に向けた支援が広まる中、英語を専門とする学生達とそうではない学生達との間に良い意味での差別化を作り出すには、プレゼンやディベートに関しての技術に加え、専門職に相応する高度な語学運用能力、幅広い異文化理解、そして幅広い国々の政治、経済、思想などについて知識を涵養することが上記の学生達には求められている。

通訳や翻訳に関わる科目は、英語を専門とする学生達に、より高度な語学運用能力を鍛える機会を与え、同時に多様な異文化理解を促す科目の一つとして考えられている。特に、筆者が専門とし、教育を担当している通訳に関する基礎科目では、正確な聴き取りとターゲットとなる言語への瞬時変換が求められる。その技術を支えるのが、語彙や文法についての知識と幅広い話題へ精通していることである。通訳対象としての発話で使用されている語彙や文法が単純且つ明瞭なゆっくりとした発音であれば、英語を専門としない学生でも通訳することは可能であると思われ、通訳内容的をさほど外さないであろう。しかし、関谷(2013)で指摘されているように、実際のビジネスの場面では、そのように単純なものを通訳する機会は稀であり、専門用語が使用された難解な文を通訳しなければならないこともしばしばある。また、会議や商談などの場面に於いては、滞りなくコミュニケーションを図ることが必須であるため、確認のため何度も聞き返すことや詰まりながらの通訳は受け入れられない。さらに、通訳の対象となる話者が明瞭な発音で且つ明確な語彙と文法を使用して話してくれることも保障されていない。世界の共通語としての位置づけを得ている英語は世界中の人々に話され、その人々によっては母語の影響により、所謂、訛りが生じ、英語母語話者が話す標準的な英語とはかけ離れている場合もある。その上、時に

は「～について説明してください。」と補足説明を依頼されることもある。例えば、日本企業と他国籍企業とを繋ぐ通訳を担当する際に、日本側が「お盆期間は休業で対応できないこと」を伝える際に、「そもそもの、お盆休暇の意味」、「お盆休暇の期間」、「お盆休暇期間に通常どういうことを日本の人々はするのか」といった、日本人には当たり前となっている前提情報が、他国籍企業側には共有されていないため、「何故、休業となるのか」という理由が判然としなければ、相手側をイラつかせてしまう可能性もある。円滑な関係を築くお手伝いをさせていただく上でも、前提情報を共有するための補足が必要となる。この補足をするためには、先に述べた幅広い話題に精通していることが求められるわけである。

上記のように緻密な通訳をするには、相当の語学運用能力と異文化に関する知識が必要であり、一筋縄ではいかないため、英語を専門とする学生以外が専門領域の学習と並行して習得するには時間的な制約もあることから難しいかもしれない²。それ故、通訳や翻訳の科目を履修し、知識の涵養と語学力の研鑽に努めることは、英語を専門とする学生達には大変有意義であり、英語を専門とする学生としての価値を見出す手助けができるものと思われる。そのような意味で、通訳や翻訳教育の役割やそれらに寄せられる期待は大きく、英語を専門とする学生達にしか成し得ないであろう技と知識の習得を促すような教育内容を考えなければならぬ。

1.3 考察対象の紹介—否定表現

上述で「英語を専門とする学生達にしか成し得ないであろう技と知識の習得」というキーワードを述べたが、その具体例の一つに「正確な通訳」が挙げられる。瞬時に、より相応しい表現で通訳することは容易ではないが、國弘(1999)で述べられているように、特に英語を日本語に通訳する英日通訳を行う際に、「ただ、概略が適切に伝われば良い」という姿勢では、通訳者としての価値が危惧される。換言すると、國弘(1999)は、日本人の母語である日本語の表現が豊かでなければならないことを示している。この理由から、通訳上の語彙選択に関して注意を向ける必要があり、本稿では、以下のような否定表現を取り上げるものとする。

- (1) a. There is no hurry for people to learn about the problem.
 b. I don't buy vegetables that are not perfect now because I rarely see them.
 (関戸冬彦, 小暮正人, Jake Arnold, Ken Ikeda (2014))
- (2) a. Never have I seen so much rain.
 b. Not in any other countries do you see such things.
 c. In not many years will Christmas fall on Sunday.
 d. In not many years Christmas fall on Sunday.
 (Klima (1964))

紙面の都合で例文の紹介はごく一部であるが、上記のような否定表現に対して寄せられた学生の不適格な通訳内容を考察の主体とし、より相応しい表現で通訳を行うことが出来るようにするための支援策を以下で議論する。

2 通訳教育の実践について

2.1 対象者

北九州市立大学の外国語学部英米学科では、通訳演習が学科の専門科目、ビジネス科目群の1つとして位置づけられており、クラス単位で開講されている。1クラス当たりの平均受講者は25名程度である。習熟度に分けてのクラス分けはなく、当該の学科の2年生以上の学生が受講できるようになっている。前期開講の通訳科目では、留学の準備段階の学生が多く受講していることから、TOEFL® ITP のスコアで表すならば、510~550点のレベルの学生が受講する傾向にある。一方、後期開講の通訳科目では、前期の通訳演習で実力をつけた学生が引き続き履修したり、留学を終えて帰国した学生が履修したりする関係でレベルが非常に高まり、TOEFL® ITP で表すと、平均して550点程度の学生が集まる傾向にある³⁾。

2.2 教材と通訳演習の進め方

通訳演習のメインテキストとして以下の(3a)と(3b)を、補助教材としては(3c)、(3d)、(3e)を用いた。

- (3) a. CNN Student News Vol.2 (朝日出版社)
 b. What's on Japan 8 (金星堂)
 c. TED Talks (<https://www.ted.com/>)

- d. A Message from the U.S. Ambassador Caroline Kennedy to Japan
 (https://www.youtube.com/watch?v=Xtqn6G23_io)
 e. Negation in English (Klima (1964))

通訳演習は、メインテキストを中心に予習をしてきてもらい、小松(2005)や友野、宮元、南津(2013)を参考に、即時(変換)応答(Quick Response)、シャドローイング(Shadowing)、換言化(Paraphrasing)、通訳メモトレーニング(Note Taking)、逐次通訳(Consecutive Interpretation)、サイト・トランスレーション(Sight-translation)など通訳の基礎トレーニングを行っている。

Quick Response は、語句レベルの瞬時変換能力を鍛えることに加え、語彙の豊かさを形成するためには欠かせないトレーニングである。通常は、テキストに掲載されている英単語とその意味を暗記し、それを即座に変換できるか、ペアを組んでお互いに確認し合ったり、あるいはモニターに表示される英単語やその意味を見ながら各自が口ずさんで瞬時変換できるかどうかを確認したりする。筆者の演習クラスでは、その基礎トレーニングから更に一歩進み、英語から日本語への変換時に、テキストに掲載されている意味から派生させた、様々な類似した日本語表現を作り出すことや、それを英単語に応用し、英語の類語も抱合せで覚えるという、より語彙力の増強に役立つ応用練習を執り行っている。また、教室設備の都合上、モニターでの提示が難しい場合は、ペアで確認作業を行ってもらっている。

Shadowing では、頭の中で発話されている内容を復元できるようにするため比較的クリアな音質で、スピード的にも速すぎないものを積極的に取り入れている。CNN Student News は、実際の TV Program で発話されている標準スピードの音声と、それを分かりやすく明快な発音とスピードで録音し直した音声の2種類の教材があり、Shadowing の際には比較的容易なものをを用いて耳慣らしをしている。

Paraphrasing では、テキストに出てきた日本語から英語へ変換する問題を中心に取り上げ、テキストが示す模範解答以外の形式で同様の意味を表す英語表現が出来るように各自考えてもらい、後に全体で確認し

て他の受講者と解答例を共有してもらっている。

Note Taking の指導では、Rozan (1956)の7つの原則に基づき、様々な通訳者の Note Taking を参考にしながら、各自「言葉」ではなく「概念」を抽象的にメモすることができるように記号を作ってもらい、自分が見やすい Note の作り方を模索してもらっている。

通訳を行うための一通りの準備が終わった後、Consecutive Interpretation のトレーニングへと移る。この演習時には、ニュース番組やインタビューなど日常で耳にするであろう生の英語を聞き、Note Taking の技能も生かしながら学生一人一人に通訳してもらおう。他の受講者の通訳を聞くことで自分の訳出で不適切であったところや情報が抜け落ちていたところの確認もしてもらっている。

その Consecutive Interpretation の演習が終わった後、欠かさず行っているのが読まれた原稿を見ながらの Sight-translation である。これは、先程述べた、自分の訳出の不適切であったところや聞き取りが出来なかったところを視覚的に確かめる上では欠かせないトレーニングである。以下で詳しく述べることとするが、Consecutive Interpretation の演習時に学生の訳出が不適格の場合、他の学生も同様のミスをしていないかの確認と、誤訳をしてしまった箇所の抽出をしておく。そして、Sight-translation の演習時に、誤訳が目立った場所を集中的に取り上げ、地の文で正確に訳出ができるかどうかを検証し、何が誤訳の要因になっているのかを探るようにしている。

3 学生の否定表現に対する通訳

3.1 過度な単純化

本節では否定表現が表出した際に見受けられた学生たちの通訳を紹介する。紙面の都合により全てを網羅的に紹介することは不可能であるが、まずは、扱った例文を(4)に記載する。

(4) a. Make sure your student understand the speed limit in and around Hamilton when leave, but also that there is not hurry to get home at the expense of their safety!

(Harris County High School Media Squad. (2014))

b. There is no hurry for people to learn about the problem.

(関戸冬彦, 小暮正人, Jake Arnold, Ken Ikeda (2014))

c. I don't buy vegetables that are not perfect now because I rarely see them.

(ibid. (2014))

d. Never have I seen so much rain.

(Klima (1964))

e. Not in any other countries do you see such things.

(ibid. (1964))

f. In not many years will Christmas fall on Sunday.

(ibid. (1964))

g. In not many years Christmas fall on Sunday.

(ibid. (1964))

(4a)の there is not...のような、be 動詞と否定辞 not の組み合わせによる否定文は、英語を専門とする学生が通訳する際に困難を要するものでは決してない。事実、筆者が担当したクラスでこの例文を「安全性を犠牲にして、家に帰宅することを急ぐ必要はない。」という模範的な訳出から大きく逸脱した表現をした学生は一人もいない。しかし、(4b)はどうであろうか。一見すると形式的には(4a)と類似しているように思われる。さらに、否定副詞である rarely が使われた例文(4c)、否定副詞が前置され倒置が起きている(4d-f)に対しての訳出はどうであろうか。加えて、(4f)と類似した構造を成している(4g)の訳出はどのようなものであるだろうか。以下の(5)に、担当クラスで多く見受けられた学生の訳出を代表的に1つずつ提示する [4]。

(5) a. 帰宅する際、Hamilton とその周辺の制限速度を生徒が把握しているかと、安全性を犠牲にして帰宅することを急ぐ必要がないということを生徒が分かっているかを確かめなさい。

(cf. (4a))

b. # 人々にとって、急いでその問題について学ぶ必要はない。

(cf. (4b))

c. # 今、(型崩れをしていない) 完璧な形の野菜を買うことはない。なぜなら、それらを目にすることがないからだ。

(cf. (4c))

d. # そのように大量の雨が降るのを見たことはない。

(cf. (4d))

e. # そのようなことを見れる国はない。

(cf. (4e))

f. # 長年、クリスマスの日が日曜日と重なることはないだろう。

(cf. (4f))

g. * 長年、クリスマスの日が日曜日と重なることはないだろう。

(cf. (4g))

非常に興味深いことに、(5b-g)の全ての例文において、否定の gradation を表す no や rarely、さらには否定要素の前置に伴って起こる倒置という現象が見られる特殊な構文が使用されているにもかかわらず、学生は(5a)に倣って「～ない」という単純な否定表現を用いて通訳している。Klima (1964)、Liberman (1975)、Rochmont (1978)、Culicover (1991)によると、標準的な否定形態素である not に比べて、比較的大きな音韻的際立ち(prominence)を帯びる no、rarely、そして構造自体がその否定要素を際立たせる否定倒置構文では、それぞれ否定の度合いが異なることが示唆されており、彼らの論に従うと、単純に「～ない」と通訳するのは適格ではなく、「全く～ない」、「ほとんど～ない」、「当分～ない」のように、gradation をつけて通訳することが求められる。

上記のような不適当な表現で通訳してしまう要因として、「まずは話の概略を伝えなくてはならない」という意識が働き、内容を頭の中に記憶したり、メモを取ったりする際に、(過度に)単純化、簡略化して記録してしまっている可能性が挙げられる。実際、通訳演習をはじめた初期段階では、そのような「概略だけでも伝えなければならない」という意識の芽生えから、上述したような訳出が頻繁に観察される。確かに、初期レベルの通訳としては受け入れられるかもしれない。しかし、1 節で既に述べたように、この程度のレベルの通訳であれば英語を専門としない人々でも産出することが可能であるので、英語を専門とする学生が将来に渡り、この程度のレベルの通訳から抜け出せないならば、通訳を専門的に学ぶ価値が見出せなくなる。よって、語用論的に不適格な訳出については、その訳出を

するに至った経緯や要因を徹底して追究し、修正していく必要があると考える。

3.2 不適格な訳出の原因分析—Error Analysis

前節で言及したように、(5)の語用論的に不適切な訳出をするに至った経緯として、認知プロセスの観点から、話の概略を正確に伝えるために、記憶領域への負荷を軽減すること、また Note Taking による処理時間を出来るだけ短縮することにより生じた結果であることが予測される。しかしながら、もう一方で、認知プロセスの問題ではなく、そもそも否定語彙の gradation や使用されている構文の構造と機能について知識を有していないことから生じる結果である可能性も残されている。前者の場合は、聞き取りの際に音韻的に prominent である否定要素に注意を払うと同時に、Note Taking を工夫して、否定の度合いを反映する形でメモを取るようにすることで、比較的容易く克服できるように考えられる。後者の場合は、語彙情報や文法についての知識の欠如からもたらされるものであるため、英語学研究によってもたらされる知見を応用すべき課題であると筆者は考える。

まずは訳出のエラーがどのレベルで生じているのかを明らかにする必要があり、そのために有効とされる手法が発話を記載した原稿を用いての Sight-translation である。Sight-translation は、視覚的に目に入って来たものから随時処理していく訳出手法であり、文処理 (Processing) に関して脳に出来るだけ負荷をかけさせない、というメリットがある。もし、この Sight-translation の演習で、語用論的に相応しい訳出ができれば、(5)の不適格な訳出は、語彙情報や文法についての知識の欠如ではなく、認知プロセスの負荷によるものであると結論付けられる。

3.3 分析結果

Consecutive Interpretation の演習で学生が示した不適当な訳出箇所を中心に、上記の Sight-translation を行った結果、結論を簡潔に述べると、(4b-e)の例文を正確に訳すことが出来た割合は、1 クラス 25 名中 5 名を切っていた。さらに、着目すべき点として、(4f)と(4g)の対比の例文については、当該の 2 つの例文のコントラストを捉えた上で適切な訳出をすることができた学生は 1 人もいない。

受講していた学生達への聴き取り調査によると、否定語彙の **gradation** に関しては単語帳や英文法書で知っておくと良い予備的な知識として指導されることが多く、あまり意識して学習した記憶がないということだった。同様のことが、否定倒置構文にも言える。特に印象的だったのが、クラスの殆ど全員の学生が(4f)と(4g)の対比を見たことがないと答えたことだ。この2種類の対比的な例文は、英語学研究の領域では、否定倒置を扱う際には必ずと言ってよいほど参照されるものである。前者は、否定副詞が前置されることに伴い主語と助動詞の倒置が起こっており、否定の修飾領域 (**scope**) は文全体を覆っている。すなわち、文否定になるので、模範的な訳出として、「クリスマスが日曜日に重なるなんてことは、当分ないだろう。」が与えられる。他方で、後者の例文は、否定副詞の前置が起こっているにも関わらず、主語と助動詞の倒置は起こっていない。否定の **scope** としては部分的なものである。つまり、部分否定の解釈しか得ないので、模範的な訳出としては、「クリスマスが日曜日に重なる時が、もうすぐ訪れるだろう。」という表現が挙げられる。

3.4 分析結果に基づく結論

前節の結果から、「高校までの英語教育の中で語彙や文法についての指導があまり重点的には行われていない」と結論付けることは時期尚早であるかもしれない。というのも、今回の調査結果だけではデータ不十分であり、更なる詳細な調査が必要とされるためだ。しかしながら、本稿を作成するに当たり、被験者となってくれた学生達への聴き取り調査から、そのような傾向にあることは示唆される。通訳の世界では、語彙や文法については重点的に学ぶ必要はないと主張する通訳指導者もいるが、筆者はそれらの意見には賛同しかねる。なぜなら、話者の伝えたい意図や感情は、声の速さやトーンだけでなく、使用される語彙や文法によっても反映されるからである。関谷 (2013)でも指摘されているように、通訳者は、この話者の意図や感情までも伝える役割を有している。これは、機械翻訳や概略化した通訳しか行うことが出来ない人々には、なかなか成し得る技ではない。それ故、英語を専門的に学ぶ学生が付加価値を見出すためにも、意味と意図を抱き合わせて橋渡しできるようになることが非常に肝要なポイントとなる。

3.5 英語学の知見を活かす取り組みの必要性

3.3 節で、当該の学生達が否定語句の **gradation** に関しての情報と文法知識をあまり豊富に有していないという事実が明らかとなったため、何らかの対策が必要である。そこで筆者が提案したいのが、英語学の知見を活かした指導法である。具体的には、音韻的などの要素に強勢が置かれるかを示した音韻マッピングのデータの提示やターゲットとなる否定表現が用いられた構文と類似した例文を複数紹介することにより、一般化を導き出して、それを知識として定着させる方法である。ちょうど、否定倒置構文についての説明で(4d-f)に羅列したようにすると良い。様々な例文を比較検討して、それらの中にある一般特性を導き出すことは英語学研究の世界では、学派を超えて頻繁に用いられる手法である。その先の分析については多種多様に別れるが、通訳の領域では、どのように分析するかについてはあまり関係がないので、「例文の一般化として、どういうことが言えるのか」というところまで指導すれば良い。

もし仮に、高校までの英語学習で語彙や文法についての指導が、あまり重点的には行われなくなっているならば、大学での英文法や英語学の講義が担う役割は大きなものとなるであろう。しかしながら、教員数やカリキュラム上の点から、すべて英文法や英語学の担当教員に、それらの教育を任せるのは現実的には難しいかもしれない。そのため、通訳や翻訳など実務分野を扱う教員であっても、語彙や文法についての指導ができるように準備しておかなければならないと考える。豊かな語彙や文法についての知識がなければ、**native-like** に英語を操ることも、理解することも難しく、**native-like** に英語を運用できるようになることを目指す学生達を指導する立場にある教員は、その点を十分心得ておくべきである。

4 まとめ

本稿では、通訳教育の実践の中で、学生が示した否定表現に対しての語用論的に不適切な通訳に焦点を当て、なぜそのような訳出をするに至ったのかという要因を模索した。考えられる要因として、記憶などの認知プロセスにあまり負荷をかけようとしまいとする(過度な)単純化や、そもそも、語彙情報や文法についての知識を欠いていることが挙げられた。

Sight-translation を用いた調査の結果、要因としては後者が有力であることが判明した。この結果を受けて、この課題を克服するためには、やはり語彙や文法についての指導が不可欠であり、英語学の知見を応用することが有効であることを示した。将来の研究課題としては、具体的にどのように英語学の知見を活かしながらの指導ができるのかという、指導内容そのものの具体化が挙げられる。通訳教育に於いては、このようにエラーを分析して、その原因を究明し、英語学の立場からアプローチする手法は比較的新しく、あまり研究が進んでいない。よって、英語学（言語学）の観点から、どのような支援が出来るのかを考えて、提言していくことは有意義であると考えらる。

注

- [1] 本稿でのエラー分析 (Error Analysis) は、Corder (1967)によるエラーの分類に基づくものとする。Corder の研究は言語獲得研究を扱う心理言語学や第二言語習得論にも強い影響を及ぼしており、Ellis (1994) において詳細に解説してある。Corder (1967) および Ellis (1994)らによれば、エラーには複数の種類があり、それらは大きく次の6つに分類されるとしている。①発話、筆記、読解、聴き取りの運用能力に関わる *modality* のレベル、②発音、文法、語彙、文体に関わる *linguistics* のレベル、③省略、挿入、代替表現に関わる *form* のレベル、④能力上の問題かパフォーマンス上の問題かを区別する *type* のレベル、⑤異なる言語間の干渉による *Cause* のレベル、⑥ *norm* と *system* 間の緊張に関するレベルが挙げられる。
- [2] 筆者の知る限り、そもそも、国際化教育として通訳や翻訳についての科目が全学的に開講されている事例は殆ど無いように思われる。
- [3] 前後期の履修者の習熟度については、筆者の担当する平成 26 年度開講の通訳演習履修者のデータに基づくものである。
- [4] (5)で用いている # は、文法的ではあるが、意味、語用論上、適切な訳出とは言えないことを表している。他方で、* は非文法的であることを表し、訳出が完全に誤りであることを示す。

引用・参考文献

- 1) Corder, Stephen. (1967). The significance of learners' errors. *International Review of Applied Linguistics* 5, 160–170.
- 2) Ellis, Rod. (1994). *The study of second language acquisition*. Oxford: Oxford University Press.
- 3) 産業人材パートナーシップ グローバル人材育成委員会. (2010). 報告書—産学官でグローバル人材の育成を. 経済産業省.

http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/san_gaku_ps/2010globalhoukokusho.pdf (2015年4月15日参照)

- 4) 関谷英里子. (2013). 同時通訳者の頭の中. 東京：祥伝社.
- 5) 國弘正雄. (1999). 國弘流英語の話しかた. 東京：たちばな出版.
- 6) 関戸冬彦, 小暮正人, Jake Arnold, Ken Ikeda. (2014). CNN Student News Vol.2. 東京：朝日出版社.
- 7) Klima, Edward. (1964). Negation in English. In Jerry Foder and Jerrold Katz (eds.), *Structure of language* (pp. 246-323). New Jersey: Prentice-Hall, Englewood Cliffs.
- 8) 山崎達朗, Stella M. Yamazaki . (2014). What's on Japan 8. 東京：金星堂.
- 9) 小松達也. (2005). 通訳の技術. 東京：研究社.
- 10) 友野百枝, 宮元友之, 南津 佳広 (2013). 通訳学 101. 大阪：大阪教育図書.
- 11) Rozan, Jean-François. (1956). *La prise de notes en interprétation consecutive*. Geneva: Georg. [Translated by Andrew Gillies (2004) as *Note-taking in Consecutive Interpreting*. Gracow: Tertium.]
- 12) Harris County High School Media Squad. (2014). Back to School Driving Safety Tips. <http://hchsmediasquad.com/tag/safety/> (referred on April 25, 2015.)
- 13) Liberman, Mark. (1975). On conditioning the rule of Sub-Aux Inversion. *NELS* 5 (pp. 77-91).
- 14) Rochmont, Michael. (1978). *A theory of stylistic rules in English*. Doctoral dissertation. University of Massachusetts, Amherst. [Published by Garland, New York, 1985.]
- 15) Culicover, Peter. (1991). Polarity, inversion, and focus in English. *ESCOL* 91, (pp. 46-68).

受付日 2015 年 4 月 30 日、受理日 2015 年 7 月 23 日